

施設野菜経営を営む法人のGLOBALG.A.P. 取組事例

～販路拡大及び従業員の意識向上にGLOBALG.A.P. の認証取得を活用～

小竹 博之（西三河農林水産事務所農業改良普及課）

【令和2年4月17日掲載】

【要約】

大野精工株式会社（所在地：西尾市。以下、大野精工という。）のアグリ事業部「キングファーム（King Farm）」は、平成28年に農業参入し、施設栽培によるトマト及びイチゴを生産している。販路拡大、従業員及びパートの意識向上を図るため、平成30年8月からGLOBALG.A.P.（以下、「GGAP」という。）の認証取得に取り組み、平成31年4月に、県内では6例目の認証を取得した。その結果、国内における新たな販路の拡大と香港への海外輸出とともに従業員やパートのリスク管理の意識が高まった。

1 はじめに（背景）

西尾市で精密部品を加工する大野精工は、リーマンショックを契機に事業の多角化を図り、平成28年にアグリ事業部「キングファーム」を立ち上げ、30aの施設栽培（トマト及びイチゴ）で農業参入した。キングファームは、平成30年に110aへ規模拡大し、イチゴ狩り及び農場直営カフェを運営するとともに、生産したトマトを大手スーパーや青果市場をはじめ生協や地元小売店に出荷している。

2 GGAP認証取得の目的

キングファームがGGAP認証に取り組む契機となったのは、主要な出荷先の大手スーパーがGGAP認証を取得した生産者からの仕入れを優先する方針を示したことであった。また、海外では多くの大手スーパーがGGAP認証を取引条件としていること、日本でも東京オリンピック・パラリンピック（以下、「オリ・パラ」という。）への食材調達基準としてGAP認証が示されたことにより、キングファームはGAP認証取得の重要性や将来性を再認識し、GGAP認証取得が現状の出荷に加え、海外輸出を含めた新たな販路拡大も期待できると判断した。さらに、GAP認証取得は、農場の信頼性や透明性の確保とともに従業員やパートの意識向上にもつながると考えた。

3 GGAPの認証取得の取組

キングファームでは農場長、栽培管理責任者及び本社の技術指導員らの4名によるチームを結成し、GGAP認証取得に取り組み始めた。当初は基準文書を読んでも何を行えばよいのかよく分からなかったため、県の補助事業を活用してコンサルタントに取組指導を依頼した。管理点と適合基準の考え方やリスク評価の考え方を学んだことで、行うべき事取り組むべき事項が明確になった（写真1）。また、チーム会を月2回開催することとし、平成30年8月から平成



写真1 現地でリスクを確認する様子

31年1月の模擬審査や3月の本審査に向けて進捗状況の確認や問題の改善をすすめていった。改善に向けた取組は、本社が過去に取得したISO認証の作業工程を参考に、円滑にすすめられた。この定例チーム会の実施により、各々が責任を持って対策を実践できた。

4 成果、今後の目標

平成31年4月に、県内で6例目（イチゴでは県内初）のGGAP認証を取得した。GGAP認証取得はバイヤーに対して非常に有効なアピールポイントとなり、新たにリゾートホテルやレストランへマトの販売が開始され、令和元年10月には香港へ輸出することもできた。また、認証の取組を実践していくうえで、ルールや手順を定めて文書化したことにより（写真2）、従業員や新規のパートに対してスムーズに教育ができるようになり、交差汚染や異物混入等に対するリスク管理への意識が高まった。

今後、キングファームは、従業員やパート間のミーティングを通して、GGAPのブラッシュアップや意識向上を図るとともに、他のアジア諸国への輸出やオリ・パラへの食材提供を目指していく。



写真2 文書化されたルールの一例